

鼎 談

続鼎談 1 蜷川幸雄のメモから読み解く現代社会

— 仮面とお面の間に存在するもの、そしてその未来 —

生江 明 川村 潤子 原田 忠直

教師像とは？

原田：前回の鼎談（「蜷川幸雄のメモから読み解く現代社会 - 仮面とお面の間に存在するもの - 」『現代と文化』2017 年 9 月発行第 136 号）では、「多数派お面」をいつから、どのようにして被らされてしまったのか、その答えは教育現場に潜んでいるのではないかと、という共通認識を 3 人が抱いたところで終了しました。もう少し具体的にいえば、蜷川幸雄が叫んだ「若者よ、もっと自己主張しろよ！」という言葉が教育現場で教師たちは生徒や学生に向かって語っているのか。むしろ、教師は「自己主張なんかしなくてよい」「正解だけ覚えろ」と教えているのではないかと、

表 1 学校の先生はどんな人？（複数回答）（単位：％）

	日本	米国	中国
尊敬できる人	11.5	32.0	68.4
従うべき人	19.4	22.9	35.5
何でも打ち明けられる人	2.3	21.5	5.8
ふざけられる人	2.6	28.7	13.6
表面的に付き合う人	62.6	16.8	28.2
時には敵になる人	20.7	19.5	24.2
儀礼的に付き合いをする人	36.8	31.0	43.3
うるさい人	30.4	11.5	18.9
怖い人	22.8	18.0	25.1
抵抗したくなる人	34.4	10.5	24.7

日本児童教育振興財団内日本青少年研究所 研究員胡霞編著 『国際比較からみた日本の高校生 - 80 年代からの変遷』（監修千石保，一般財団法人日本児童教育振興財団，2014 年，『日常生活に関する調査』2000 年 4 月より，P37）

1 今回の鼎談は、『現代と文化』第 136 号（2017 年 9 月）に掲載された「蜷川幸雄のメモから読み解く現代社会」の続編です。前回の鼎談を一読していただいた上で、この鼎談を読んでいただけることをお勧めするとともに、鼎談者 3 人の願いでもあります。

コラム 1 快感がこの身を包み込む。 原田 忠直

新緑の頃、私は、日曜日でもあるにもかかわらず電車で揺られ高校に向かった。その日、午前 10 時からわが校のグラウンドでサッカーの練習試合が組まれていた。学校に着くと対戦相手の高校はすでに到着し、グラウンドの片隅で着替えを始めていた。1 年生の私に、試合に出るチャンスはなく、球拾い程度の役割が与えられているに過ぎなかった。せつかくの休みを雑用で過ごすことは決して愉快ではなかったが、その日に限れば、一つ楽しみがあった。それは、対戦校に、中学時代、同じボールを追いかけたチームメイトがいたからである。私は、荷物を部室に置くと、急いで友人を探した。彼はすぐに見つかった。そして、小走りで近づいていくと、彼も輪の中から一人抜け出してきた。「久しぶり」というと、「ああ」と連れな返事が返ってきた。「試合出るの?」と聞くと、「出ない」と乾いた答えが返ってきた。なんだか妙につれない。「それじゃ、同じだね。試合終わったら一緒に帰ろうよ」と誘うと、彼の顔はこわばり「これ以上は、話せない」という。「どうした?」と聞くよりも早く、「うちの高校は、他校の生徒と話すことを禁じているんだ。もし、見つかったら、あとで怒られる。今こうして話していることも顧問に見つかったら怒られるんだ」というと、逃げるように輪の中に戻っていった。「どうして?」「冗談だろう?」という私の声に決して振り向くことはなかった。しばらくして、友人が通う高校に、そのような校則が本当に存在していることを知った。もちろん、友人の高校だけではなく。当時(1970 年代後半)、愛知県下の多くの高校(とくに新設校を中心に)では、理不尽な校則が存在し、管理教育が実施されていることも知った。私は、たまたま通っていた高校が伝統校で管理教育から逃れることができた。しかし、友人の震える唇、怯えた瞳、オドオドと輪のなかに隠れていったその後姿を決して忘れることはない。何の権利があって、私たちの友情を割くことができるのか。たとえ高校時代に限定されたものであったとしても許されることではあるまい。ましてやそれが教育という名のもとに行われたことに怒りすら覚える。それゆえ、教員を尊敬している割合がわずか 1 割程度であるという事実は、管理教育が常態化した現在、それは極めて当然の帰結である。と同時に、この数値を前にすれば、自然と快感がこの身を包み込んでくるのだ。もちろん、それが管理教育のもとで傷ついた心を癒すことはないし、自死した若者を蘇らせることはできない。しかし、この快感が未来を切り開く一つの原動力にはなりえる。未来を担う若者のために、この惨めな数値が、大きな一歩に反転することを願いたい。

いう疑問を抱き、そのような教育現場の意義を問うてみようというのが、今回の鼎談のテーマです。

ただ、日本における教育について語るにあたり、次の資料の意味を 3 人で考えることから始めたいと思います。この資料は、“日本児童教育振興財団内日本青少年研究所”が日本、アメリカ、中国などの高校で実施しているアンケート調査結果です。

表 1 をみて、日本の高校生が教師をどのように捉えているのか、アメリカと中国と比べ非常に異なっている点が多々あります。まず、「尊敬できる人」と回答しているのは、わずか 1 割しかいません。アメリカと中国と比べ非常に低い値です。また、一番多いのは「表面的につき合う人」が 6 割強もいます、アメリカと中国と比べ非常に高い値です。私は、この調査結果に対して、正直、快感がこの身を包み込む感じを禁じ得ないし(コラム 1・参照)、高校生もなんだかんだといて「多数派お面」の下に、自分の「仮面」を持っているのではないかとすら思っていますが、お二人はどのような感想を抱きますか。

生江：日本の若者はある意味、嬉しいほどに健全だね！価値意識を教育(注入)すれば、相手はそのようになると考えることは誤りですね。けれど、ではどのような価値意識を若者みずから生み出していくかという課題は残りますね。友人観と合わせてみたいね。

コラム2 表1の解説 生江 明

1. 尊敬できる人：

中国は68.4%と日米中の3か国で一番高い。米国はその半分以下の32.0%。日本はさらにその3分の1近い11.5%。中国の6分の1に過ぎない。日本では大多数が尊敬できないと考え、ではどうとらえているかは以下の項目に見える。

2. 従うべき人：

中国が最も高く35.5%、米国は22.9%。日本は19.4%。尊敬できるからと言って従うべきというわけではない、というのが上の項目と対比させると見えてくる。ところが、日本では、尊敬できなくとも従うべきと考える割合が高くあることが判る。米中は尊敬割合より、従うべき割合が下回っているのに対し、日本では尊敬割合より、従うべき割合の方が高く出ている。

3. なんでも打ち明けられる人：

米国が日中に比べて極めて高い21.5%。中国はその4分の1の5.8%。日本はそのさらに少ない2.3%と教師への全面的な信頼が極めて異例となっている。

4. ふざけられる人：

米国は最も高く28.7%、中国はその半分の13.6%、日本はその5分の1のわずか2.6%である。

5. 表面的に付き合う人：

米国が最も低く16.8%、中国はそれより8割増しの28.2%、日本が最も多く、中国の倍以上、米国の4倍弱の62.6%。つまり日本では半数以上が教師とは表面的に付き合う人と考えていることになる。

6. 時には敵になる人：

上の質問よりさらに厳しく、敵対する可能性を問うこの質問に中国は24.2%、日本は20.7%、米国19.5%があると答えている。

7. 儀礼的に付き合いをする人：この問いは、敬語や目上意識を持っているかという問いか？

中国が最も高く43.3%、次いで日本36.8%、米国は31.0%。

8. うるさい人：

日本が最も高く30.4%、中国は18.9%、米国は11.5%。生徒に干渉してくる割合と考えるなら、日本は米国の3倍教師が干渉的といえるか。

9. 怖い人：うるさいだけでなく、逆らえぬ圧力を感じると考えることが。

中国が最も高く25.1%。日本は22.8%、米国18.0%。

10. 抵抗したくなる人：

米国が一番低く10.5%、次いでその2.5倍弱の中国24.7%。日本がさらに多い米国の3倍の34.4%である。将来の社会変動の地底マグマは日本が最も大きいことを意味するのか。

各項目を見ていくと、日本では、教師を尊敬しているのはわずか1割ほど、6割を超える生徒は「表面的に付き合う」存在と見ている。なんでも打ち明けたり、時にふざけたりできるのは、わずか2.3%。逆に抵抗したくなるのは34.4%と、生徒にとって教師はあちら側の人であるようだ。日本の教師は生徒から尊敬されるより、怖い人うるさい人と思われることを選んでいるのかな？ 管理教育の象徴として教師は恐れられる存在として学校に君臨するよう教育されているのかな？ 脅しの教育をやっているのかな？ (コラム2・参照)

原田：教師とは、脅しの存在だという一面を否定できないと思います。尊敬もせず、表面的に付き合っているのに、従うというのは、教師を「学ぶべき師」と認めているわけではなく、ただ、「学則」とか、「社会の常識」みたいなものを振りかざす代弁者のような存在にすぎない、と生徒は理解しているのでしょうか。教師とは、少々、悲しい存在ですね。でも、高校生たちはそのよう

にみているのは決して教師だけではないと思います。彼らの周りの人間の大半、友人とか、あるいは親友も含めて表面的に付き合っているのかもしれませんが。この点は、後で詳しく述べることになると思いますが、その前に、実際の高校で教壇に立つ川村さんは、この調査結果をどのように受け止めますか。

川村：そうですね。痛いところを突かれていますと思います。ただ、私の見解を述べる前に、先生方が中学生や高校生だった時、教師を表面的に付き合う対象として捉えていましたか。まず、この点を知りたいです。

生江：ぼくが中学生の頃、先生たちはきわめて個性的で、自分のカラーをぶんぶん匂わせる教師が多かった。定年間近の国語の先生は、彼の愛するマレーネ・ディートリッヒ¹がどんなに魅力的で、自分の独自の考えを鮮烈に表現している女優だって、身振り手振りで熱演してくれる。1m90位ある巨体の彼が、妖艶なマレーネ・ディートリッヒを黒板の前で演じて見せる。ぼくは唾然として見ていたけれど、馬鹿にすることはなかった。畏敬の念は持ってた。マレーネ・ディートリッヒの写真を、我が家の本棚にあった映画雑誌で見つけた時、「えー、おとなの女だ！」と何故か感動したんだ。彼女にではなく、彼に対してね。思い出すと、いろんな個性あふれる教師が、大人たちが、日々授業の中で熱演していたね。でも、あの頃、ぼく自身は、自分の考えと言うにはあまりに断片すぎる、むしろバラバラな感想程度の代物しか持っていなくて、じっと世界や他人や自分を見つめるしかなかったという記憶はあるね。ぼくが高校生の時に、蜷川を見てまぶしいと思ったのは、彼には自分の独自の考えをもってそこを歩いている！と思えたからだと思う。前回の鼎談か、それとも雑談の最中だったか覚えてないけど、川村さんは、蜷川に孤独を感じたといっていた。孤独とは独自の道を歩き始めていることの証であって、それ以外の何物でもないと思うな。ぼくにはっきり物心がついたのは、中学1年の終わり頃からだね。英語の担任から評価されることが嫌になったんだよね。その人の評価がまともな評価になっていないと思えたんだよね。そういう人に評価されたくないよって。だったら、どうするかというと、相手の価値観とか、評価軸をズタズタにしてやる、とつぶやく嫌味な生徒だった。ぼく、中学2年の時に、いくつもの科目にわたってそうだった。学校の中の評価軸は何の価値もないと思っていたな。でも、そうした疑問をぶつけると、まともに応えてくれる先生が何人もいたんだ（コラム3・参照）。

原田：そうね、私も面白い先生にたくさん出会いました。とくに、高校時代。たとえば、英文法の先生は、入学したばかりの授業で、「河合塾の創設者の二男は私の同級生で、つまり、君たちの先輩だ。だから、浪人して河合塾に行くのは、後輩として当然だ」といきなり言い出すんだ。

1 マレーネ・ディートリッヒ（1901～1992年）、ドイツ出身の女優、歌手。『嘆きの天使』、『モロッコ』など多くの映画に出演、『リリー・マルレーン』の歌で有名。

コラム3 中学の思い出 生江 明

中学2年の時、学年5クラスでクラス平均得点が断然最下位だった。教室に来た教師が、ああここは最下位クラスだな！と度々言うのに頭にきて、クラスで塾を開こう、全員が9教科のどれか自分の得意な科目を担当し、先生をやるという塾を提案した。和気あいあい、楽しい塾になった。週二回の塾が待ち遠しく、教えるために勉強しなくちゃ！と、結構みんな張り切ってやった。小テストをやるものあり、教壇でバック転をやる実演付きのものあり、笑いと賑やかなヤジありと楽しかった。一学期経つと、わがクラスの平均点は、学年断トツの最上位クラスになった。くだんの教師が、クラスにやってきて、このクラスに何が起きたのかと聞かれた。なにもありませんと、みなで大笑いした。

それとか、国語の授業で、朗読を当てられ読んだら、「お前の声はなかなかいい」と褒められ、ちょっと嬉しくなって、その先生の授業は真面目に出席していると、「お前は、なんで、いつも授業を受けているんだ。俺の高校時代は、学校サボって映画館に通い詰めたもんだ」って言い出すんだよ。こんな話はまだまだたくさんあるけど、今、教師がこんな発言したら、たぶん新聞沙汰だよ。でも、当時の先生たちは、自分の価値観に従って話していたよ。管理もされていなかったし、お面なんかかぶっていなかった。みんな好き勝手に振る舞っていた。ただ、今から思えば、教師たちの価値観には、学校の長い歴史のなかで育んできた伝統的な要素が引き継がれていたと思う。たとえば、江戸川乱歩、杉原千畝、都留重人、谷川徹三などの卒業生が歴史の中で表現した価値観、もちろんそれぞれの主義・主張はまったく違うけど、管理という言葉では、絶対に括れない強い意志のようなものを、教師たちも意識していたんでしょ。それに、彼らもほとんど卒業生だったから、教師という立場以上に、先輩として、自分なりにアレンジした価値観を後輩に伝えようとしていたと思います。

生江：そうだろうね。管理する人や規則があるので、自分は管理されています。というのではなく、自分の基準や考えがあって、それに従って、こう思うという自分の考えを表明してくれる先生たちがいて、同級生とよりも先生といろんな話をしていた。でも、誰にも話さず自分の中で煩悶していたことは途方もなく大きかった。結局、自分にとっての重大なテーマを直接的に語り始めたのは、50代半ばから60代初めの頃になってからだったと思う。それは、自分の中で自分に対し固く閉ざした壁があったことに気づいたことがきっかけだったね。うーん。

原田：そうかな？ 生江先生と知り合って、もう20年近くになると思うけど、初めてあったときから、重いテーマを熱く語ってたよ。そんな壁があったなんて知らなかった。まあ、それはそれとして、教師像に話を戻しましょう。川村さんの高校時代、あるいは現在の高校の教師は、こんなグイグイくるような先生は存在してるのかな？

川村：先生方のお話を聞いていると、そこまで個性的な先生はいなかったなと思いますが... 面白みのある先生は、今もいますよ。ただ、問題は、役職に就くとパーソナリティは前面に出てこなくなるような気がします。たとえば、生活指導部の担当になれば、怖い先生を演じるという感

じでしょうか。

原田：なるほど。役職が教師の個性を潰していくということですかね。でも、先生が急変するようなことが目の前で起こったら、生徒たちはびっくりするだろうね。こうしたことも、生徒の教師像を作っていくことに少なからず影響しているんだと思います。ところで、今の話を聞いて思ったんだけど、川村さんが、もし、「来年から生徒指導部の担当だよ」と言われたらどうするの？

川村：ん～、そういう状況は考えたくないですけど、「やりたくない」とはいえないでしょうね。断れば解雇されるようなことはないと思いますが、「使えない人材」という烙印は間違いなく押されます。それに、引き受ければ、生徒との表面的な付き合いが始まるんでしょうね。まさに感情労働ですね。

原田：教師の個性は、難しい選択を前にして削ぎ落されていく、と言ってしまえば、それまでですが、問題の本質は、教師の価値観と学校の価値観が一致していない、ということだと思います。多くの教師は、伝えたいこと、教えたいことがあるからこそ、教師を目指すはずですが、そうした個人的な希望は、生江先生がいていたように、管理する人や規則の前で深刻な葛藤を余儀なくされる。もちろん、教師が成長していくため、葛藤は必要ですけど、どうも教師の成長を育てるような葛藤ではなさそうです。川村さんの言葉を借りれば、「使える人材」と「使えない人材」の分類でしかないですね。実際、頭髪検査とか、服装検査などを本当に、教師はやりたいと思っているのか、と時々思っていたのですが、「やるか」、「やらないか」、それは教師を「続けるか」「辞めるのか」の二者択一を迫ることなんでしょうね。この意味からいえば、それは本当に難しい選択です。

「プロの素人」と「素人のプロ」

川村：そうですね。難しい選択を迫られ、教育の現場を離れた人も少なくないと思います。ただ、私としては、そうした事例をいくつか挙げるよりも、個人的には、蜷川論に戻って考えてみたいです。というのも、蜷川は、お面と仮面の違いを十分理解していたんだと思うんです。彼が演出するとき、お面をかぶった役者に、どんな演出をしようとしたのか、そのやり方みたいなところを教えていただけませんか。それは、教育を語るうえで、すごく重要な気がするんです。それに、蜷川の演出では素人の役者を多く起用されるということですが、なぜでしょう。今の教育現場、また企業の視点から考えると、基礎知識、基礎学力がない人に何かをやらせるのはとても手のかかるというか、時間のかかることだと思われがちです。それでも、あえて素人を起用するのか。とても興味があります。いかがですか。

生江：うーん、とてもヘビーな質問ですね。そんなテーマを彼と話したことないんだけど…。あれは、彼がそれまでのアングラ系劇団²の演出から、東宝という商業演劇の演出へ大きく舵を切って、東京の日生劇場で市川染五郎（現在の松本白鸚）と中野良子主演でシェークスピアの『ロミオとジュリエット』を演出したときのことなんだけれどね。ぼくは、そのゲネプロ（通し稽古）を観に行った。観客席の一番後ろの壁にもたれかかって観ていると、蜷川は同じように観客席の後ろを、時々場所を変えながらじっと舞台を見つめていた。幕間で彼がそばに来て、「俺のおふくろの世代がこの劇場には来るんだ、歳取った彼女たちがその年齢を忘れて、自分の青春時代に戻り、ロミオとジュリエットのむごい青春に涙を流すことが可能かって思うんだよ」と何気なく言ってまた次の場所に去ってしまった。当時、アングラ小劇場は、若者の熱烈な支持を集めた運動だった。彼が商業演劇の大劇場の演出を引き受けることで、彼の劇団はほぼ誰も賛成せず、むしろ裏切りだという意見が強く、解散してしまった。でもぼくには、彼が見ていた演劇世界は、誰の味方をするかではなく、これまで観客として登場してこなかった市井の人びと、それもとりわけ自分の親たちの世代をも巻き込む世界として捉えようとしていたのだと思った。そして、その後の2006年には、彩の国さいたま芸術劇場を拠点とする「さいたまゴールド・シアター」という演劇集団（55歳以上の公募団員による）の結成に至った。2016年には平均年齢77歳のこの劇団は、その後も毎年公演を重ね、蜷川の死後も公演を続けている。パリや香港などの海外公演も行い、その活躍の場を広げている。彼の舞台ポスターは、主演者よりも演出蜷川幸雄の文字の方が俄然大きく、演出家の名前でも客を呼ぶんだというメッセージが最初から出ていた。それは彼がというよりはプロデューサーの考えかもしれないけれどね。でもそれに応える演出を彼はした。それは演じ方の演出ではなく、彼の演出ノート、絵コンテ（舞台スケッチ）を見るとよく判るんだけど、舞台全体の設定、音楽、照明などすべてにわたり彼は構想し、その構想を実現する舞台は時に劇場ではなく、寺院や神社、あるいは円形劇場のような場所を必要としていった。逆の場合もあるようだけれどね。そして、彼の演出の最大の特徴といっても良いのは、その幕開きのシーンだ。多くの人びとが行き交い、時にはけんかをし、踊り、いざる人びと、物乞いのひとびと、からかい合う人びとなどが登場する。その中に主人公が登場し、舞台が始まる。その瞬間で、この芝居がどのような世界の中で演じられていくのかが、この第一幕、第一場で提示されていく、というスタイル。通行人3という符丁のようなものしか与えられていない科白の一つもない役であっても、それは丁寧な駄目出しをしていく。それはこの最初の場面で、観る者を一気に芝居の世界に曳き込んでいく大事な役割を彼が与えていたからだと思う。プリュージェルの絵を感じるのとはそこなんだよね。このスタイルは小劇場時代から変わらない。

2 アングラ（アンダーグラウンドの略）。1960年代に起きた反権威、反既成概念の文化。芸術運動の流れの一つとして、演劇の世界では、唐十郎の『状況劇場』（赤いテントを劇場として各地で前衛演劇を展開したことから、『赤テント』とも呼ばれた）。寺山修司の『天井桟敷』、鈴木忠主の『早稲田小劇場』、佐藤信の『黒テント』など多くのアングラ・小劇場運動が活発化した。蜷川たちの『現代人劇場』（のちの『桜社』）もその一つ。

原田：なるほど。でも、生江先生、この話面白いけど、川村さんの質問から逸脱している感じですけど....

生江：はっはっは、話がだいぶ飛んでしまっただけね。なんだっけ、ああ素人を芝居の中に多く起用したのはなぜ、という話だったね。彼にとって、素人がプロかという区分はなかったと思う。いや、そういう二分法の思考自体を彼は拒否していたと思うな。私は専門家ですという匂いを振りまいていたある劇評家に対し、その劇評に抗議の壁新聞のようなものを劇場入り口に貼り出して、その前に彼は一人で立っていたこともある。「プロの視点から？ 糞食らえ！」というのが彼の中に激しくあった。誰かに雇われてこの世を生きている人っている？ いないでしょ。どのひとも「プロの素人」なんだよね。それからすると、「私は専門家。プロでございます」というスタンスで出てくる人を彼は、「素人のプロ」だと思っていたと思う。劇場前に看板立てて吠えていた彼が、彼の家にぼくが行った時、そんなことを吠えていた。

原田：「プロの素人」と「素人のプロ」ですか... 言葉が逆さになっただけですけど、その意味は、かなり違いますね。この違い、面白そうです。生江先生、もう少し解説してください。

生江：んーん、素人とプロを分けたがるプロを「素人のプロ」と言い換えたらどうかなあ。それと、素人は手が掛かるというのね、うん、それは玄人の役者でも同じだったと思うよ。彼のけいこ場での有名な話で、何を考えてるんだ！と叫ぶや否や、ベテランの役者にも灰皿が飛んでくるといふのがある。彼が激昂すると、演出助手がさっさと灰皿を横へどけてしまう。そこらじゅうの投げつけられるものを探し、彼はしまいには、自分の履いていたスリッパを投げたりと、投げるものを探すのが大変なんだと笑っていた。そこに素人も玄人もない。彼の罵声が浴びせられたのは、ベテランとか新人の区別はまるでなかった。素人を「子ども扱いする」ことはなかった。あなたはどうかどう演じるか！ってね。

原田：なるほど。この定義に従えば、教師像はかなり鮮明に理解できます。高校生が捉えている教師像とは、「プロの素人」なのか「素人のプロ」なのか。いずれなのか見えてきます。「私は演劇のプロだよ。だから、私の言うことを聞いていれば、いい演劇ができるよ」という言葉の背後に、なんとも薄っぺらなものを感じます。高校の教師も同じですね。私は、教えるプロだよ。だから私に従いなさい。とか、私は立派な社会人だよ。だから、私の言う通りに頭髪、服装を整えなさいと。そういえば、河合塾に通っていた時、すごく人気のある先生が数人いた。でも、彼らの授業は、科目とは全然、関係ないことばかりで、社会問題とか、自分史のような話が延々と続いて、合間にテキスト開いてみようか、という感じだった。でも、教室はいつも満員で、立ち見もありました。予備校だからといって、浪人生は、受験勉強のテクニックを教える講師だけを望んでいたわけではなかったんでしょね。私は、高校時代の授業が、そんな授業の連続だったか

ら違和感はなかったけど、多くの浪人生が衝撃を受けてました。ある友人が、「面白い話を聞けて、本当、浪人して良かった」としみじみ言っていました。学校や予備校には、これまで知りえなかった新鮮で、刺激的な価値観がたくさん転がっていたんですね。本来、学校とは、教師という媒介によっていろいろな価値観をプールしておくべき空間だったんだと思います。それに、学校以外にも、そうした価値観がいろんな所に埋め込まれていたはずです。たとえば、私に小説の面白みを教えてくれたのは、ある喫茶店のマスターでした。ある時、漫画を読んでいると、こっちも面白いよと、といって大江健三郎の本を渡されて。それから、カウンター越しに読後感を聞いてもらったり、議論したり、本当、楽しい時間を過ごしました。生江先生の言葉を借りれば、マスターは、「プロの素人」そのものです。あ、また昔の話になってしまって申し訳ありません。川村さんの質問には、まだまだ続きがありましたね。

生江：それと、もう一つ重要な点として、「基礎学力がない人に何かをやらせるのはとても手のかかるというか、時間のかかること」だって川村さんが言ったけれど、相手が物わかりの良いことが手間のかからないという話は、うーん、逆から考えてみようか。ぼくは中学の3年間、主要5科目はほとんど満点だった。9教科でも平均97.8点は取っていた。授業中はリラックスタイムであるか、退屈なだけだった。基礎学力があるから？ いや、中学の頃から数学や物理、歴史の本は大学生が読むような本を読んでた。手のかからない生徒だっただろうね。でも、その生徒の立場からしたら、「基礎学力がないから駄目だとか、手が掛かるから駄目だ」とか言っている先生の授業は退屈だった。でも、本質的な問いを持って、授業をやっている先生の授業はとても楽しかった。高校に入ったら、高1の一学期、試験の点が平均で20点いくかどうかになった。中学までのトップが歯が立たなかった。英語の副読本は哲学のような本だった。大学に行ったらその本がまた副読本として出てきてビックリした。大学の授業は楽勝だった。だって、単語帳から訳文まで全部そろっているのだから。逆に、高校の授業は本当に大変だった。一番大変だったのは国語の時間。ほとんど生徒たちが作品論、作家論などの分析を書いてきて授業中にそれを互いに検討し合う。一つの事象を多くの視点で読み解いていくことが刺激的だった。教科書には作品の一部しか出ていないけれど、授業の準備ではその作品全体だけでなく、その作家のほとんどの作品を読んでいく。それに対して、大学に入ったら、講義はまるで中学の授業のようだった。

大学生になったら、中学の先生から落ちこぼれている中学3年生の家庭教師をやって欲しいと言われた。やってみたら、中学の数学でなく小学校の3、4年の数学からわかっていないことが判った。彼は数学の基本概念、1とかゼロとかの概念、掛けるとか割るとかという概念が腑に落ちていなかった。家庭教師として、数理哲学のような話ばかりやっていたけれど、自分では面白かった。勉強しなおした気がした。その生徒も、次から次へと疑問を出してくる。一学期したら、学校での彼の数学の試験は満点だった。英語もそうだった。わからないということは、本質的なところで合点がいかないから、そこから先へ行けないのだと。分らないということは、本質的な問いを発しているのだということに気が付いたんだ。そして、段階1が終わると次の段階に行くこと

いう段階論（階段論）は間違いだということにも気が付いた。上のレベルをやると、基礎の不十分さがわかるので、そこへ戻る。すると、基礎も応用編も同時にわかるようになる。最初は手間がかかるけれど、途中からバンバン先に進むんだよね。基礎というのは土木工事の基礎なら、上に建つものが分かっている、10階建築なら、このくらいの基礎、というように固定したものと考えるけれども、人間の勉強の基礎は、樹木の根のように、枝が横に広がれば、地中で根がその根を広げる。枝が空を目指して高く伸びれば、根は地中深くにその根を伸ばす。基礎学力とは変化し、成長するものなんだよね。固定的な基礎なんてないのさ。

人間の基礎とは、樹木の根のように育ちゆくもの

川村：樹木のようなものだというのは、実感できます。私は、高校時代まで、毎日、まったく遊ぶこともせず、勉強ばかりして、受験のための知識というか、基礎学力を覚えることに命をかけてましたから。でも、それって今、振り返ると、全然意味がなかったことに気が付きます。もちろん、もう少し記憶力があれば、多少は役立つことはあったかもしれないけど。それでもやっぱり、大学に入ってから、映画を見たり、海外いったり、小説読んだり、専門書をかじったりして、これまで触れたことのなかった世界に手を伸ばし始めると、足元に、根っ子みたいなものが、張ってきているかも、って多少は実感しています。もっとも、まだまだすごく小さくて、細い樹ですけどね。うーん。ただ、生徒を前にして、本質的な話をするとはなかなかできないので、授業に余裕ができると、私の好きな映画を見せたり、海外で撮ってきた写真を見せたりして、私のような高校時代の間違いをしないでという意味も込めてみせるのですが…。私より生徒たちの方が本質的なことを知っているのでは、と感じるときはよくあります。

生江：生徒の基礎学力がないと嘆く教師がいるとしたら、それは生徒の本質的な問いに、教師の側に答える力がないということだけかもしれないよ。基礎学力という言葉が、何を意味しているのかを捉えなおす必要が教師の側にあると思う。それは教師の基礎学力の問題とも言える。ぼくは自分の教えている学生たちが本を読むこと自体を面倒に思うのは何故だろうと20年ほど前に考え込んだことがあった。学ぶってなんだろう？という問いだね。それは同時に、その頃よく言われた「基礎学力がない」ことが何を意味しているかを問うことでもあった。「読み書きそろばんですよ！」と叫ぶ同僚もいたけれど、合点はいかなかった。

川村：私の生徒たちには、基礎学力がないことは事実です。授業やテストでは、珍回答が続出します。でも、本質的な問いができないかという、決してそうではなくて、ドキッとするような質問をしてくる生徒もいます。ただ、その問いかけに答えたくても答えられない自分もいます。たとえば、昨夏に、南京にいて、例の「記念館」を初めてみてきて、そこで撮った写真を生徒に見せたんですけど、私の感想は、なかなか言葉にできない。私の発言に対して、生徒やその両

親から、「間違っただけを教えるな」つて言われたら、どうしようっていう葛藤です。でも、私が、躊躇しているのを察したのか、ある生徒が、「先生、そこから降りればいいんじゃない？」つていうんです。つまり、とりあえず、教壇から降りて、「話せばいいんじゃない」つて。その時、なんだ生徒たちも分かっているんだ、と感動したんですけど、いつも降りれるかって言われれば、まだまだですね。

生江：それでいいんだよ。だって、先生の基礎だって成育途中なんだから。良い生徒がいるね！

原田：川村先生もなかなか頑張ってるね。でも、少なくとも基礎学力と本質的な問いができるかどうか、そこに関連性はまったくないよ。これは断言できる。それじゃ、本質的な問いとは何かと、問われれば、それは、それぞれの原風景のなかで感じたもの、あるいはそこに繋がっているものだろうね。そうした本質的な問いかけを繰り返すこと、つまり、原風景とは違うものを見た時、違和感を抱いて、自然に口から零れるような問いかけが重要なんだと思う。さらに、さっきも言ったけど、いろんな価値観に触れるなかで、とくに、「プロの素人」の話しに感化されて、自分自身をラディカルに修正していくことが必要なんだと思う。それで、もしかしたら、そんな問いかけや修正を続けていると、それぞれの仮面が形成されていくのかもしれない。でも、逆に、「素人のプロ」的な教師は、そうした問いかけそのものを、基礎学力を身につけるためには、無駄だと決めつけ、いかにして、面倒な問いかけをしない、修正を必要としない生徒を作るかに力が注がれるんじゃないかな。

生江：ぼくが高校一年の時に、数学の先生がこんなことを話してくれた。

トマト2個、ニンジン1本、牛乳1本、砂糖3匙を足すことを数式で書いてごらん。書けるかな？ では掛け算はどうか。ニンジン5本入りの袋が3袋あるが、総本数は15本ある、というのは数式になるが、ニンジン5本にトマト3個を掛けることはできるだろうか？ しかし、机の上には何個のモノが載っているか？ という問いに変えれば、トマトやキュウリという種類の違いを、何個という個数で数えれば数式化できることになる。つまり、デジタル化ということとは対象を単一の単位、モノに変換することなしにはあり得ないんだよ、分かったかな、「は～？」と彼は生徒を見てニンマリほほ笑んだ。

ぼくは感動したんだ。「それぞれに異なる個別を、モノ化すること」という数学の原理というか、哲学を聞いた気がした。彼の授業では、同じ問題を6人の生徒が前と後ろの黒板に書いて検討することがよくあった。それは解答者の論理の展開を読み解くものだった。6人が6人、別の解答をするとは限らない。同じ場合もあったけれど、正解へのアプローチの違いがよく分かった。そして3年の時には、同じ問題を代数、幾何、ベクトル、微積分など異なる方法で解くよう指示された。一つの解に向けて、異なるプロセス、異なるアプローチが見え、実に面白かった。教師は面倒な問いかけをして生徒たちを困らせた。生徒が問いかけると、さらに面倒な問いかけをし

てくる。どんな問い掛けだったか思い出せないのは残念だけれど、実に面白かったことは覚えている。「は～？」といった時の笑顔と、その時見える口の中の歯揃いの良い金歯が何故か目に浮かぶんだよね。生徒の基礎学力の無さを嘆く教師は、その生徒を教育するすべを自分が持たないことを棚に上げ、生徒側の問題としたがるのではあるまいか。つまり、教師のプログラム進行の邪魔になる生徒を「問題児」と称して排除して、問題は彼らの基礎学力の無さにあり、私の教育力の問題ではないと言いたいのではないかとということだと思ふな。高齢者介護施設などで患者の夜間徘徊行動を「問題行動」と称することも同じだと思う。認知症患者を治療するすべを持たない施設側が、問題は患者です、患者の「問題行動」なんですと問題のすり替えをしているのでしょう。管理都合の邪魔になるのは彼らだという論理は、全く逆に、管理者、運営者の資質が問われているのが本質なのよね？ 話がだいぶ飛んだかな？

原田：まあ、飛んだというか、深まり過ぎたという感じではありますが、いずれにせよ、子どもは先生に、弱い者は強い者に「従えばいいんだ」ということなんだろうね。従順な生徒に教える方が楽しだね。でも、そんなことを生徒は望んでいないよ。必要なのは、蜷川の罵声だと思う。

生江：そこで蜷川の罵声が飛ぶんだよね。それがお前か！ 一般解をやるんじゃない、お前を語れ！とね。女優宮沢りえは、蜷川と出会って、そのことを教えられ芝居の世界に開眼したと言っていたね。人と群れていれば孤独でない、ということはないよね。自分の道を歩き始める、自分の考えを進めてみる時、一人でやっているから孤独なのか、といえはそんなことはない。むふふふふとひとりだけで考え事をしているとき、孤独は感じない。自分が生きていることは感じるけれど。孤独というのは、自分が世界と縁がないことを言うんだと思うね。ああ、いじめの本質は、お前なんかこの世に存在して好い理由がないんだよ、と他人が言いはることだね。いじめる側が極めて孤独なんだね。だからいじめるのだろうね。教師はいじめを教育と勘違いしているかもね。

原田：つまり、仮面の孤独とお面の孤独の違いが分かっていないということなんですかね。

自分の「仮面」を選び取ること

生江：そう、こうやって話していて、なんか見えてきたことがあるんだ。蜷川は自分であるペルソナ（仮面）を選び取った。だが、選ぶものがない人は、誰かが配給するお面を被るしかない。そのことを指摘されたら、自分自身が選ぶものを持たないということがばれるのを恐れて、攻撃を開始するのかもしれない。ペルソナは極めて個性的で、いかなるペルソナとなるかはその人が選び取るものさ。時には憧れの人を真似るときもあるだろうね。わくわくする青春時代の特権のようなもの。時に真剣、時に滑稽。うーん、思い出しちゃうなあ！ 違うかなあ。

川村：その通りだと思いますし、私自身も、大学生生活のなかで、そのことに気づけたんだと思います。もちろん、仮面とかお面という言葉で、理解していたわけではないですけど。ただ、周りを見ると、生徒や同僚が、「自分のペルソナ」を選び取ることは、なかなかできないと思います。お面を外すということは、何かを失うのではないかとこの恐怖みたいなものがつきまとっているのではないのでしょうか。とくに、生徒たちが、お面が嫌だと思って外してしまうと、退学に直結します、一時的であれ、居場所を失ってしまいます。もちろん、どんな状況であっても、人は、誰でもペルソナを選ぶことができるのでしろうし、もしかしたら、苦しい状況の時の方が、選択できるような気がしますが... 居場所を喪失するかしなないかは、選択する時の重要な判断材料になっているのではないのでしょうか。

原田：なるほど、仮面を選びたくても、できない。そういう状況があるということですね。代償のことを考えると、「お面ごときで隠れるおのれ」の方が、安心で、安全なのかもしれません。まさに、学校という場所は、お面ごときに隠れてしまっているのではないのでしょうか。さっき生江先生が言った言葉を借りれば、「お面」を被らない人間の存在を認めない、まさに学校とはそれを体現した一つの空間なのかもしれません。この点が、いじめの源泉ではないのでしょうかね。もちろん、いじめは学校だけの問題ではないですけど、むしろ大人社会の方が、いじめはもっと陰湿ですから。

川村：子ども（小・中学校）と、大人（社会に出てから）のいじめといっても本質は同じなのではないのでしょうか。それは「みんなが言っている」「みんながそう思っている」というように、あたかも自分以外の方が思っているというように思わせてしまうところにあるのではないのでしょうか。でも、大人の場合「みんな」といったときに、社会全体が思っているかのように範囲がグッと広がってしまうという点で、より強烈になると思います。

私は小学校2年生の時から中学校を卒業するまで、毎年最低1度はいじめ（無視をされる、物を隠される、集団で暴力を振るわれる等）にあっていました。両親にも話していたのですが、あまりにもいじめにあう私を、両親は被害妄想が激しい子かもしれないと疑ったほどでした。でもその時に私を直接いじめていたのは5~8人程度だったと思うのですが、私からすると同学年の全員にいじめられている感覚になったことを覚えています。目に見えて私が仲間外れにされていたり、暴力を振るわれていたりしたので、私に関わっていない人でも私がいじめにあっていたということはわかったはずで。そんな中、私と行動を共にしてくれた人は誰もいませんでした。そうするとほんとうに「みんな」にいじめられているような感覚になっていました。

原田：「みんなが言っている」とは、いじめの常套手段ですね。でも、この言葉は、実に子どもっぽい言い方だけど、大人社会でも平気で、そう言い放つ人は少なくないですよ。そんな言葉を聞くと、「子どもですか?」とか、「あなたの意見はないんですか?」、「どうせならば、みんなを連

れてきてよ」とついつい反論してしまいましたが、むしろこの社会の成熟度を憂いたくなります。川村さんだって、社会人になって、違う意味でのいじめを受けているんじゃないですか。

川村：ええ。今も変わりはないです。そもそも私が積極的に非正規労働者を選んだことが、「みんな」と合わないのでしょうか。大学を卒業してから言われるようになった言葉は、私が非正規労働者でもいいという、「一般的には」「普通には」「正規職員になるのが当たり前でしょう」と言われ、存在を否定され続けています。「みんな」という言葉が、「一般的」「普通」という言葉に代わっただけで、言っている本質は小・中学生と大きな違いはありませんし、「私は」という意見を耳にすることはありません。小・中学校の時ならば「川村潤子」はこうなんだ、大人になったら「非正規は」「社会は」「一般的には」「普通は」というように言葉が勝手に想像され、つくられ、そうした基準によってしか、接することができないみたいです。その上、周りも「一般的」とか、「普通」ということが、何かを考えもしないし、本当かどうかを確かめるつもりもない。でも、言われる側は、自分ひとりポツンとした気になってしまいます。本来ならば、「ねえ、これってどうなのかな？」と聞けば、十人十色の答えが返ってくるべき。でも、「みんなが」といわれ続けると、自分を受け入れてくれる場所がないと、自分だけが外れているのではと思うようになり、周りの人とも距離をとられるようになっていくのでしょうか。その瞬間こそが、生江先生の言われた「お前なんかこの世に存在していないんだよ、存在理由がないんだ」と感じる時なんだと思います。

原田：生江先生と川村さんのそれぞれのいじめ論を聞いていると、生江先生の言われるいじめる側の孤独が、川村さんがいう「みんな」「一般的」という言葉のなかにはっきりとみてとれます。何かに従っていれば、安心なのかもしれないけど、その実際は、空虚な世界に生きているようですし、彼らの存在が、みんなと同じで、一般的であるとする根拠が、異端と比べ「ああ、自分はみんなと一緒にだ」ということを再確認しているだけで、それはやはり孤独としか言いようがないでしょう。少なくとも自分の迷いとか悩み、考えをぶつける相手は、存在していないのでしょうか。でも、川村さんが浴びせ続けられている「みんな」「一般的」という言葉は、本来は、学校という一つの空間で、「必ずしもそうではないんだ」とか、想像もできないような他人の生き方、価値観に触れて、「みんな」からの脱出が計られてきたと思います。さっき言った、河合塾の話に戻ると、浪人生は勉強するのが「普通でしょう」とか、浪人生は「みんな勉強している」よ、って括られるのですが、人気のある先生の教室で浪人生は、「大学に入る意味とは何か」「勉強して大学入って、どう生きるべきか？」という答えを見つけるためのヒントを求めているのだと思いますし、人生の先人たちから必死で探そうとしていたのでしょうか。予備校に限ったことではなく、学校、教師も、あるいは大人たちは、そのような求めに応えるために存在していた面が少なからずあったのではないのでしょうか。そういう役割が果たせなくなっているのではないですか。それが、表1の結果に表れている教師の捉え方の一つの原因であるのかもしれませんが、もし、そ

表2 社会で成功するために重要なことは、何だと思いますか (2つ選択) (単位: %)

	日本	米国	中国	韓国
生まれもった才能があること	13.0	5.6	25.3	19.0
努力すること	68.6	44.3	68.0	54.7
高い学歴を持っていること	9.9	40.7	17.9	14.7
健康であること	15.2	10.8	16.2	10.9
家族に恵まれること	4.8	14.6	4.8	4.9
人柄がよいこと	51.5	31.9	34.9	34.7
お金があること	7.9	24.0	8.1	27.2
運に恵まれること	17.1	3.2	9.0	9.8
有力なコネをもっていること	3.1	15.0	8.5	22.7
その他	2.2	3.6	2.9	0.7
無回答	0.2	1.0	0.8	0.0
総数	1850	1560	2518	1833

国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター編『高校生の生活と意識に関する調査報告書 日本・米国・中国・韓国の比較』(国立青少年教育振興機構, 2014年, P56)

うだとすれば、川村さんが指摘しているような異端的な存在者、周りから距離を置かれてしまった人たちは、誰かに相談しても、「みんな」「一般的」という枕詞しか返って来ず、いつまでも「みんな」から脱出することが難しい状況に陥っている可能性は高いですね。だから、いじめる側と同じように孤独に陥っていくことになるでしょうね。

ところで、このあたりでちょっと話を変えましょう。実は、みなさんにもう一つのアンケート結果を見ていただきたいんです(表2・参照)。この調査は、“国立青少年教育振興機構”がまとめたものです。成功するために学歴はそれほど重要視されていないという調査結果をみて、高校生は社会をよくみているな、というのが率直な感想です。ちょっと驚きでもあったのですが、少なくとも学歴社会は、この日本社会では崩壊、もちろんそもそもそんなものは存在していないかもしれませんが、いずれにせよ、学歴を高めること、勉強ができることと社会で成功することは一致しない、という重要な事実を高校生は知っているといえるのではないのでしょうか。もちろん、「成功」という定義はあいまいですけど、ただ、勉強しても失敗しないとは限らないという事実を知っていることは間違いないと思います。それに、7割弱は「努力すること」と回答しているように後ろ向きに捉えているわけじゃないし、そのうえ、「人柄がよいこと」と半数が回答しています。「まさにその通りだよ」と言いたくなります。ただ、こうした結果を教育現場に落とし込むと、教師と生徒の間に深い溝が存在しているのではないのでしょうか。勉強以外に「努力すること」を教えることができない教師。人柄をよくするっていわれても何も考えが及ばない教師の姿が目につかびます。もちろん、生徒が望むものを与えることが教育ではないのですが、それにしても教育現場は社会の流れからかけ離れてしまっているように思いますが、お二人は、どのようにこのアンケート結果を捉えますか。

コラム4 表2の解説 生江 明

1. 生まれ持った才能があること

: 努力など後天的要因よりも、その人にそもそも宿る固有の才能を評価する指標。

中国が最も高く 25.3%余、米国が最も低く 5.6%、韓国は中国に近く 19.0%、日本は 13.0%。

2. 努力すること: 本人の努力次第

どの国も高い数値を示すが、日本が最も高く 68.6%、ほぼ同じなのが中国 68.0%、韓国やや下がって 54.7%、米国は最も低く 44.3%。しかし、米国の若者たちはこの努力を最も重要な要素と考えている。

これを逆に読めば、駄目なのは自分の努力が不足しているからと読める。

3. 高い学歴を持っていること: これを持っていれば成功するのか? と考えて回答しているとみれば、興味深い。

最も高く評価しているのは、米国 40.7%、次いでその半分ほどの中国 17.9%、韓国はやや下がり 14.7%。日本は 4 か国中最低の 9.9%。入るに易く、出るに困難という米国では卒業そのものが努力の指標として高学歴を位置づけていると考えるなら、最下位の日本が意味するものは、卒業証書の重みは評価されていないことになる、確かに。

4. 健康であること: 身を粉にして、真面目に、よく働くことを意味するなら、4 か国ほぼ横並びだが、中国 16.2%、日本 15.2%と勤勉派、米国 10.8%、韓国 10.9%とその後に続く。

5. 家族に恵まれること: 国によって、その意味が大きく異なる可能性がある。要注意。

米国が 4 か国中高く 14.6%、他は一段と低く日本、中国 4.8%、韓国 4.9%。家族の支援を高く評価する米国、その 3 分の 1 の他国。家族間断絶がアジアに広がっている?

6. 人柄が良いこと: 社会で仲良くやっていくこと。無難でつつがなく?

4 か国とも高いが、日本が断トツの 51.5%、次いで中国 34.9%、韓国 34.7%、米国は 31.9%。

7. お金があること: 個人の初期投資資本がまず大事と考えるか、あるいは個人起業の実現性が差となるのか。

高評価の韓国 27.2%、米国 24.0%、に対して低いのは中国 8.1%、日本 7.9%。

8. 運に恵まれること: 運だよ運!

断トツの日本は 17.1% と高学歴の 9.9% の倍近くが運だよ運! と見做している。やや下がって韓国 9.8%、中国 9.0%、運かなあの米国 3.2%。努力や高学歴、家族などのプッシュ要因を挙げる米国の特徴か。

9. 有力なコネを持っていること: コネだよコネ! コネの強い社会弱い社会。

韓国断トツの 22.7%、米国 15.0%、その半分の中国 8.5%。日本はその半分以下の 3.1%。

生江: 「高い学歴を持つこと」を目指すのが教育現場の目的とすれば、多くの生徒からは、学校の存在理由は縁遠いものと見做され、「私にはないものねだりです」と思われているのでしょうか。教育とは知識を積み上げて、より高いものにしていくことという教育観 (本当は、知識を深めていくことが教育だと思っただけだね) を、学校も生徒も持っていて、どうせ彼らは落ちこぼれ、どうせ自分は落ちこぼれ、という意識がこの日本社会には充満しているということでしょう。ぼくは中高の教師の集まる研究会に 20 年以上参加しているのですが、ここに集まる人たちは「島小の授業」(斉藤喜博)³ の後継者たちで、そこにぼくは希望を感じているのですが、アンケート

3 斉藤喜博 (1911~1981) 教育者。『斉藤喜博全集』全 18 巻、『第 2 期斉藤喜博全集』12 巻、国土社に膨大な著作がまとめられているが、群馬県伊勢崎市の島小学校における授業実践の記録である『島小の授業』、授業論を扱った『授業入門』など多くの著作がある。子どもたちの可能性を引き出す授業を作る授業・教育の原理そして原則を展開した教育者であり、宮城教育大で学長の教育哲学者林竹二

コラム5 努力の真意 川村 潤子

日本の高校生は、「社会で成功するために重要なことは、何か」と問われ、「努力すること」と7割弱が回答していますが、この結果を私なりに解釈すると次のようになります。

この高い数値は、「努力すれば報われるような社会であって欲しい」と願っている側面もありますが、とりあえず「努力」といっておけばいいでしょう、というような投げやりな思いが背景にあるのではないかと考えています。実際、学校で過ごしすぎて、仕事をしていても、どこか「出来レース」のようなところが多い気がしてなりません。たとえば、このレベルの学校に来た子どもたちは、このレベルの学校へ進学、もしくは仕事も、まあ、このレベルの仕事というように、初めからその先が用意されている、と生徒たちは薄々感じているようでもあります。自らの将来を予想しているのではないか、教師や周りの大人と接するなかで、悟ってしまっているようでもあります。ですから、なぜ、あなたはそこまで劣等感を抱くのか、と思わず聞きたくなくなってしまう生徒も少なくありません。私の前で夢を語り始めるような生徒は残念ながらこれまで出会ったことがありません。それに教師は努力することを求めているようで、求めているような気がします。ここまではやるべきだ、だからやってきて当然。そのように考えている気がします。そして、生徒に課すものは初めから決まった回答、「こうあるべきだ」というものがしっかりと用意されているようにみえます。そんななかで生徒は、何のためにやらなくてはいけないのか、先生は私に何の力をつけたいと思っているのか、と疑問を抱いたとしても不思議ではありませんし、それがいつしか不満になっていくのではないのでしょうか。ただ、課題をこなし、こんなことも知らないのかと恥をかき続け卒業し、いざ社会に出る。だけどそこには、誰でもできるような仕事が残っているだけ。なぜ自分はこの仕事をしているのか、私でなければならぬのか、今までの何十年間してきたことは何に役立っているのか、そもそも自分が何を求めているのか、このような混乱は、彼らにとって、すでに悟っていた状況なのかもしれません。ですから、私は、生徒たちだけではなく、若者に無機質さを強く感じます。そんな無機質な彼らから、「努力」という言葉を聞いたとしても、それほど実感がわかない。まったくリアリティを感じることができないのです。とりあえず「努力」といえば、誰からも非難されず、そう答えれば無難でしょうという程度の意味を含む回答にしか思えてなりません。

から感じるのは、教育現場あるいは学校はそこからは遠いということです。生徒たちには未来はあるが、学校や教師たちには未来は見えませんか。もっとも、このアンケートの問いを逆さまにすると、社会で成功できない時の言い訳が浮かんでくるのでしょうか？ アメリカでは、自分の努力、高い学歴がないこと、つまり自分自身のせいだ。中国では、努力、人柄、天賦の才が足りなかった。韓国では、努力、お金、コネ、天賦の才、高い学歴が足りなかった。日本は、努力、人柄、健康、そして運が悪かった？と悪びれず頭をかくのかな？ こうした各国の傾向は、その社会のイデオロギーとも言えるか。それらをどこで学んだのだろうか？ (コラム4, コラム6・参照)

川村：私は、生江先生の言われるように、このアンケートの回答にはあらかじめ言い訳が用意されていると感じます (コラム5・参照)。私の周りにも、自分には能力があるけど、運がなくて

1906～1985) と共に教育実践の試みを各地で行った。ふたりの対話をまとめた『対話 子どもの事実教育の意味』筑摩書房、1978がある。ノーベル経済学賞を受賞した厚生経済学者アマルティア・セン (1933～) の capability 潜在能力の顕在化を教育と捉える見方に通底していると思われる。

活かされてない、と胸を張ってという残念な人、よくいます。ただ、この回答をみて、一つ思い出したことがあります。それは、今年の3月、中国の農民工の子どもたちが通う学校⁴でヒアリング調査をしたときの中学3年生の子どもたちの回答が蘇ってきました。ヒアリングでは、主に卒業後の進路について聞いたんですが、中学3年生40名のなかで進路を決めていた生徒は一人もいませんでした。なんと卒業まであと2か月しかない時期です。ところが誰一人焦っていないんです。「高校行こうかな？ 働こうかな？ ん～どうしようかな」っていう感じです。聞いているほうが焦ってしまって、「大丈夫？」みたいな顔を向けると、「なんで、そんなに早く決めなきゃいけないの」って言われました。余裕があるんでしょうね。それで、その余裕の源泉は何かと考えると、一つは、学歴はそれほど必要じゃないというのが大前提になっていると思います。少なくとも「高校行かないと、働くことができない、安い給料に甘んじることになってしまう」というような強迫観念に追われている様子はまったくないんです。それともう一つは、学歴がなくても生きていける、さらに「夢を実現できる」ことを知っているんだと思います。彼らの視線の先には、自分たちの夢が叶う社会が広がっていて、それを助けてくれる人が映っているんだと思います。農民工といえば、中国社会のなかで、最下層を形成する人びとと言われていますが、そういう人たちやその子どもたちも含めて希望を抱くことが可能なシステムみたいなものが存在していると思います。このあたりは、原田先生の専門領域ですけど…。

原田：川村さんの言う通り、中国の方が、希望を抱きやすく、実現しやすい社会であるとは思いますが。それは、「包」のシステムが存在していますから⁵。このシステムを利用して、彼らの両親とか、知り合いなど、成功している大人たちが少なくないし、そうした人びとのなかで育てば、子どもといえども自然と自分たちの将来像を容易にイメージすることができるのでしょ。つまり、大人たちのなかで希望を実現するための手段のようなものが蓄積されていて、それを子供たちに渡していくことができる社会なんです。それも実にスムーズに。大人たちの導きの手はいくらでも存在していて、そう、さっき話した、私に大江健三郎を教えてくれたような「プロの素人」がそこら中にいるんでしょうね。ただ、この話をすると、長くなるのでこれ以上は触れませんが、

4 2017年3月、浙江省海寧市の民工学校でヒアリング調査を実施した。この学校の校長は日本福祉大学経済学部の卒業生である汪希望氏が務める。なお、学校の成り立ち、運営などについて、汪希望著「中国・民工学校外史 現役校長が語る民工学校の「過去・現在・未来」」（『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第125号、日本福祉大学福祉社会開発研究所、2012年）に詳しい。

5 「包」とは、日本語では「請負い」と訳される。ただし、日本の親会社と子会社の上下関係を内包した下請け、系列とは異なる。「包」のシステムの下では、「対等・水平」な関係性が堅持され、人びとの経済活動における自由裁量権が最大化される。なお、「包」システムについては、原田忠直著「「包」の「特殊性」から読み解く「中国経済のシェーマ」 柏祐賢と加藤弘之が探し求めた中国研究の核心（その一）」（『ICCS 現代中国学ジャーナル』第10巻、第1号、2017年国際中国学研究中心）、「農民工からみた中国社会 ある一枚の写真から読み解く中国社会」『中国21』44号、愛知大学現代中国学会編、東方書店、2017年）などを参照。

コラム6 コーチング 生江 明

NHKの教育番組で『奇跡のレッスン』というシリーズがある。それぞれの競技種目で世界各国から名コーチと評価されている人を日本の子どもたちの所に招き、一週間のレッスンを提供し、そのプロセスを映像化したものである。私は欠かさず見ているのだが、気が付いたことがある。それは、日本の指導者は子どもたちを叱ることで指導していることだ。海外からの指導者は、一人一人の子どもたちの特性を見抜き、その長所を伸ばし、欠点を解決することだ。そして、子どもたちが互いを励まし合うこと、互いに伸びてゆくことを重視していることだ。最近のレッスンで、個人競技である水泳で、オーストラリアから招かれたコーチは、一人の記録ではなく、チーム全体の記録をより良くするという課題を提起した。20人で何秒をこの一週間で縮められるか？ 子どもたちは50秒と答えた。コーチは難しいかもねと考えたが、子どもたちの答えを尊重した。結果は、それをはるかに上回る成績を七日目に達成する。子どもたちの感想が素晴らしい。個人種目はこれまで孤独なものだったけれど、いま自分たちはチームとして励まされ、より高い目標を手にした。というのだ。教育に関わる人はぜひこの番組を見てほしい（オンデマンドで見ることが出来る）。ラグビー・イングランドチームの指揮を執るエディ・コーチの番組では、高校の選手たちに互いに声を出せ、互いに話をしろと言いつける。それ以前、みな黙ってラグビーをしていたが、徐々に自分はこう動く、そちらを任せたまえ、という互いの声が響き合うチームが生まれ、最終日には大学チームとの練習試合に勝ってしまう。的確な個人技の指導、子どもたちの自発性を刺激するポジティブな指導とチーム・コミュニケーションの指導が、目を見張る変化を生徒たちに生む、子どもたちの表情の変化は感動的であり、見事である。バスケットボール編、サッカー編、野球編など、どれも必見である。

日本のコーチングがひな形から外れていると叱ることで成り立っているのに対し、大きな違いが見て取れる。これは、現代日本の社会的特質であり、本鼎談のテーマと通ずるものだと思う。本文に触れた『島小の授業』が日本から消えていったことの意味を深くとらえたい。

少なくとも中国における学校とは、子どもたちの夢を叶えるための一つの空間にしか過ぎないということです。学校が何とかしてくれるという期待はそれほど強くないのでしょうか。

川村：そうそう、その距離感みたいなものは感じます。たとえば、もし日本の学校で、卒業まで2か月を切った段階で、進路が誰も決まっていなかったら、子どもたち以上に先生たちが焦りますよ。ところが、この民工学校の校長に、親との懇談、子どもを交えた三者懇談をして進路について話し合いの場を持たないのですか？と聞いてみたら、「必要ないでしょう」という答えが返ってきました。別に、面倒だから、忙しいからやらないという意味が含まれているわけではないです。むしろそこまで学校が関与する必要はない、「自分で考えることに意味があるでしょう」ということでした。

原田：校長としては、自分の道は自分で切り開け、ということですね。この点をみれば、随分と違う感じですけど、学校との距離感という点に限って、子どもたちを比較すると、あまり大きな違いはないでしょう。むしろ表1と表2のアンケート結果を合わせてみれば、日本の生徒たちの方が、教師・学校・学歴に関しては、距離を置いているように映ります。でも、学校を出た後は、大きく違うのではないのでしょうか。中国の農民工の子どもたちは、たくましく生きて、逆に、日本の子どもたちは、なんだか社会のなかに埋没してしまっているようです。もちろん、さっきも

言いましたけど、学歴に関係なく、チャンスを手にすることができる社会が存在しているかどうかの違いは非常に大きいと思います。この違いをどのように捉えるべきなんだろうかな。

生江：なるほどねえ…。日本の生徒たちは、自分の学歴によって自分の将来が見えてしまっているかのような錯覚に陥っているのかなあ。自分の掌の上で自分の踊りを踊ることでなく、誰かの掌で踊ることが人生だと思っているのかもね。誰の掌が自分にとって正解なのか、得なのかを悩んでいるのだろうか？ 高校・大学ときてその先は、会社。本当かねえ。ぼくはそういうレールに大学卒業・大学院卒業してから、乗ってこなかったから余計にそう思うという訳ではないんだ。ぼくの家族や親戚見渡しても、みな自分の道を歩いている。それって、他の人たちもそうなんじゃない!? だけど、学校の教師はそうは言わない。君らはもっと良い学校に行け！と単一軸上の前へ行けと叫ぶ。けれど、人生の道は、多軸でいろんな方向を指している。学校が叫ぶ単一軸上の前へ、という叫びは、生徒たちにあきらめを提供している。どうせ俺なんて、私なんてさあ！と。この社会が多様性を力とする社会ではなく、単一軸上の前ほど良い暮らし、安定した暮らしができると吹聴している。ある意味みなそれに乗せられているのかな、不幸だね。う～ん。良い学校良い会社に教え子を送り出した教師の勤務評定が良くなるというシステムがあるなら、教師はますます叫ぶだろうね、合格率を上げる！とね、可哀そうに。それは自分の人生を誰かに売り渡すことを示しているのね。「良いか！ 多数派に与すれば、君たちの未来は明るい！ 多数派を探せ、そしてそのお面を被るんだ、俺のように！」って？

川村：「自分の人生を誰かに売り渡す」ですか。確かに合格率を上げるためには生徒の顔を見ていないだろうし、生徒も教師を見ていませんよね。生徒が興味を持つこと、それはテストの頻出問題であってほしくないですね。お互い利益関係の上に立っての関係となれば、一人の人間として関わりあえなくなってしまうですね。まあ、私の高校時代がまさにそうだったので痛いところです。ですが、生江先生が言われるように、みんながどんなお面をかぶっているか、周りを見渡すんですね。今、どれが多数派お面かなって探す感じでしょうか。

原田：多数派お面を探し始めるという表現はよくわかります。そう思った瞬間に、子どもたちは大きく変わり始めるのでしょうか。ただ、それをもっと具体的に、今の社会に落とし込むと、どんなことが起こっているのでしょうか。

生江：昔、今から20年ほど前にある教員の研究室で女子学生6人に、親友の定義を聞いたら二つに分かれた。2人は「耳の痛いことでも言ってくれる人」が親友。残り4人は「自分のことはなんでも認めてくれる人」が親友。どういうことだろうね。

川村：私なりに解釈すると、「耳の痛いことでも言ってくれる人」と答えた2人は、自分のこと

を大切に思ってくれているからそこまでいってくれる、だから私もあなたを大切にする、という意味での親友ということですかね。相談する側も相談を受ける側も、関係が崩れないであろうと思って、心の内を明かしてくれると思っているのではないのでしょうか。つまり、「自分のことをなんでも受け入れてくれる」ということが前提にあつての「耳の痛いことでも言うてくれる人」を親友と答えたのではないかと思います。なので、6人とも「自分のことを認めてくれる人」を「親友」と思っているのではないかと思います。

またどちらの意見を言った人も結局は自分が言った意見のような人、親友がいないのではないのでしょうか。つまり、「親友」というものがいるのであれば、「自分のことを認めて」、「本当のところはどうしたらいいのか教えて」と「親友」を思い浮かべて、普段の生活の中で、「孤独」を感じているのではないのでしょうか。ただ、ここでの「孤独」とは前回の鼎談で出てきたような思考をしたりするような「楽しい孤独」ではなく、誰かにすぎりつくことを求めた「寂しい孤独」のような気がします。... みんな自分を認めてくれる場所、人などを求めて何かから逃避しているのでは、でないか、「自分のことを何でも認めて」と思わない気がします。正直、それを人に求められるのはきつい気がするからです。なので、そのために求められる「親友」であるならば、すごく軽い関係に思えてなりません。そういう人に限って、いろんな人に相談しているだけの可能性があるのではないかと感じてしまいます。厳しい意見から易しい意見の幅を聞いて自分のちょうどいいところのものを、相談した結果として選択するのではないかと思っちゃいます。

生江：潤子さん！ 自分のことが認められることの乏しさを背景として、自分の言うことを何でも認めてくれる人こそ親友だ！という定義の仕方は、主観的にはありだね。ただし、これは大変な事態が起きていることを予感させる。ひとつは、言葉の定義をみんなが自分に都合の好いように定義し始めているということ。その筆頭が、国会の安倍君かもね。冗談ではなくて、バベルの塔が本当に起きている。みんなが勝手に言葉を使い始めている。ふたつは、言葉によるコミュニケーションが既に大きく崩壊している可能性がある。では、これまではどうだったんだろう？そこはあいまいなまま来ていたんだと思う。「ぼくはこう思うんだけどなあ」くらいの話でね。では、何が違うのかといえば、自分の定義以外を排除することが起きている。それは、生徒や学生の言葉を排除し続けてきた教師や学校の続けてきたことを裏返しているんだ。元凶はそこにあるかな！奪われ続けたことを拒否するやり方は、敵に似せておのれをつくる！というやり方だね。分断されたのだから分断してやる！というやり方かな。社会が崩壊していることになる。ヘイトスピーチも同じだね。自分の価値観以外を認めないというやつだ。これは、50年前の大学内に吹き荒れた党派闘争と同じだね。相手の言ってる意味と自分の意味をすり合わせ、その言葉の奥にどのような背景があるか、どのような言葉とつながっているのか、相手と自分の食い違いから相手を、そして自分に対する理解を深めていく、どちらが正解かではなく、またどちらが勝ったかではなくね。こういうことを拒絶して、勝ち負けをつけようとしていた5、60年前の話だけだね。それがずっと続いているんだ。誰も誰とも出会わずに大人になっていくのだろうか？そ

れは孤独だねえ。根がとても深いね。うーん。

川村：「勝手に言葉を使い始めている」。なるほど、言われてみるとそうかもしれません。さっきも、お話ししましたが、たとえば私が友人や知人と仕事の話をするときに必ずといっていいほど言われることは、「教師採用試験受けている?」「今後将来をどう考えているの?」という言葉が投げかけられます。それは、「講師」という言葉の定義が既にあるかのように感じます。「講師」という言葉は「正規の教師になりたいと思っている人」というように勝手に定義されているような気がします。でも、私の現在の生き方は、みんなの言葉に従ってはいません。だから私が自分の考えを伝えようとしても、なかなか通じません。話が絡み合うことはありません。恐らく私から「正規の教師になるための努力をしている」という言葉があれば、スッと落ちていくのでしょうか。さらに、私が「大学院で…」という話をすれば、もう話が迷子になります。逆に、私も相手が何を話しているのか分からなくなるときがよくあります。ただし、お互いの言葉の定義が合わないことが会話の中で頻発し、「噛み合わないな」、「なんか考え方違うな」と思っているのであれば、仕方がないのですが、私の場合は、相手の言葉に従うのが当然でしょうという圧力みたいなものをよく感じます。でも、さすがになんで従わなければいけないとついつい腹の底で思っているのが、顔に出してしまうんでしょうか。最近、私は距離を取られるケースが増えてきたと感じています。

原田：なぜ、「勝手に言葉が使い始められている」ようになったのか。別の言葉でいえば、「勝手に誰かが作ったルールがまかり通っている」ということなんでしょう。いずれの言葉も、その源を確認することは難しいと思いますが、それでも、教育という視点に限れば、教育学には素人であっても、少しは、見解を述べる事ができると思います。前のほうで、高校時代の話をしました。実は、中学時代の話はあまりしたくない。理由は、まさに愛知の管理教育の最先端に行くような学校でしたから。つまり、私自身は、管理教育の実践校とそれとは真逆な自由を何よりも尊重する学校（高校）という、まったく異なる環境に身を置くという経験をしました。こうした二面性を持ちながら、大学時代、猿田正機先生が書かれた『トヨタシステムと労務管理』に出会います。この本を読み、管理教育とトヨタの労務管理が密接に関係していること、つまり、中学までの教育が、生産性を向上させることを可能にする人材養成であった事実を知り、膝が震えるような感覚に襲われたことを今でも覚えています。猿田先生の研究室で、より詳細の事実を教えられ、「君と同じように、ショックを受ける学生は少なくないよ」と慰められたのですが、正直、今でも立ち直れない点は、多々あります。たとえば、掃除の時間、給食の時間になると、校内には有名なクラシック音楽が流れ始めるんです。今、街中で、それを耳にすると、思わず箸を探し、お腹が空いてきます。本当、「パブロフの犬」でしょう。私は、そんな自分をオーウェルが描いた『1984』に登場する人物よりも滑稽な人間だと感じます。あくまで私の個人的な見解ですけど、管理教育とは、校内のスピーカーから流れる、外側の何かによって生徒を、まるで犬のよ

うに扱いながら教育するという仕組みなんです。もちろん、その音色によって、生徒だけではなく、教師も同じように「パプロフの犬」になっていくんでしょうけど。でも、私からみれば、たぶん、お二人も同じだと思いますが、その音楽を外側から流れてくるものという意識はあるでしょうし、居心地の悪い音色だと感じるでしょうけど、必ずしもそう感じない人は少なくないと思います。なぜなら、この音楽こそが、「みんな」「一般的」の正体だと思います。「トルコ行進曲だ！ さあ、掃除を始めよう！」「どうして君はやらないの？」「トルコ行進曲が流れたら、みんな掃除始めなきゃだめでしょう！」って言う感じかな…。

そう、この鼎談は、古市君の著作を読み始め、どうして彼の言葉の意味が理解できないのかという疑問がその始まりでしたけど、それは、スピーカーから流れてくる音楽のようなものを感じたからではなかったかと思います。

川村：みなさんの中では、私が古市君の本を一番たくさん読んだと思いますし、今でも、時折、彼のツイッターを追っていますからね。でも、彼の本をどれだけ読んでも、意味が分からないんですよ。まったく噛み合わないという感じです。

原田：でも、随分前のことだけど、川村さん、『絶望の国の幸福な若者たち』を読んで、「共感できる」って言ってたじゃない？

川村：あの時は、古市君の言う通りだと思いました。それに、原田先生が言っていた、もう一冊の『希望の国の…』のなんでしたっけ？

原田：村上龍の『希望の国のエクソダス』ね。

川村：それは、分からなかったし、まったく共感できませんでした。確か、キーワードは、「この国には希望がない、お金はあるけど、希望はない」でしたか？

原田：そうそう。

川村：このフレーズを読んで、私、そもそも「お金」持っていないし理解できるわけがないと思いました。なんとも嫌味な言葉だとも感じました。でも、古市君の『絶望の国の幸福な若者たち』を初めて読んだときは、確か、大学1年生頃だったと思いますが、なんとなく、その通りだと思いました。だけど、そのあと、彼の本を読み進んでいくうちに、違和感が増えてきて、今は、古市君に「若者は幸せだと思っている、だからいいんじゃない」といわれると、いやいや 幸せだと思ってないからね、といたくなりますよ。「あんた、何様って」っていう感じです。

生江：今、二人の話を聞いていて思ったことがあるんだ。それはね古市君が被っているのは、巧妙な「多数派」つていうお面ではないのか？ということなんだ、「多数派お面」の別ヴァージョンかな。彼は相手に問いを投げ掛けた上で、自分の答え、ないし、次の展望を語る。問い掛けは、直球でなく目新しい SFF（スプリット・フィンガード・ファストボール）かツーシームで投げてくる。しかし、次の球はごく平凡な（誰でも知っている）直球かカーブ。一球目は鋭いときがあるが、二球目は「多数派球」なんだ。答えが常識的というのが受けている理由なんだろうと思う。うーん、そうすると、「多数派お面」を子どもたちに被らせようとしてきた人びとは、そうすれば、世の中に受けるといって「受け狙い」で教育をしてきたことになるのかな？「空気を読め」という言葉も、その場の多数派を捉えて、「それに付いていけ！」という意味だよ。うーん... 多数派の「意見」ではなく、「多数派」がポイントになるね。

議論の中でこそ、相手や自分の意見は鮮明になっていくものだとしたら、学校の中で議論が消えていった（消されていった）ことの意味は、つまり、HomeRoom（ホームルーム）とか学級活動の時間が学校からの伝達のみになって、子どもたちの議論の場が消え、小学校の児童会が消えた 1970 年代後半頃から、「意見」より「多数派」が重要視されるようになってきたこと、と言えるのだろうか？ 子どもたちは、相手が権勢、権力を持っている側に付くことを学びはするが、その意見については冷めているのか、聞いていない可能性がある。いや、聞いて覚えていても、ああ「正解」と言われるのはそれらしい、試験までは覚えておこう、後は忘れてよし！というくらいのものか。議論していないから、自分の考えとのすり合わせが無いままに、貯めているだけのこと...

空気を読むという状況判断だけが学校で学ぶことだとすると、いつしかいじめグループが多数派を形成していくのだろうな。それが、学校を卒業しても外の世界で繰り返されるとしたら、子どもたちが大人になってもそれは変わることがないことになりはすまいか？ このことを如実に示すのが、表 1 の数字かもしれないね。つまり、日本の子どもたちは、教師は尊敬できる人でなく、また表面的に付き合うだけでうるさい存在と捉えてはいるが、抵抗したくなる存在であるというもの。ではどのような抵抗か？ 出席を取るから教室に入っているけど、授業中におしゃべりしていた学生が多いという時期もあったけれど、最近少なくなって、スマホをいじっているのかな？ 教師に向かっての「積極的抵抗」でなく、せいぜいが、後ろ向きの「消極的抵抗」しかないのでは？

鼎談の初めで、原田さんが「正解を憶えろ」という話が出たけれど、その代表が「先生」や「教師」さ。世の中の多数派、いや、正解とされている権威側というべきかな。そこからはみ出る者は「問題児」、「問題生徒」、「問題行動」という名で呼ばれるようになり、弾かれる対象とみなされる。これは生徒の側からでなく、管理都合から見た言葉だよ。基礎学力がないという表現も同じだろうね。これっていじめの典型じゃない!?

実は同じことを教師もされてきた。教師はそれを学び始めた。1970 年代後半からだろうね。そうすると、こうした「いじめ構造」に現在の現役世代がすっぽり入っていることになってしま

う。つまり、「意見」は大事じゃない、大事なのは「空気を読むこと」と学校で学び、卒業したらその学びが有効な社会だった、ということになる。息苦しい世の中という表現が、現在の社会状況を表す言葉として使われているのはこういうことなのだろうか？ うーん、これは大変なことをぼくは今、言っているのだろうか!?

みなさんどう思う？

小学校6年の時に、ぼくはこの児童会の会長だった。気の無い司会をしていたら、担任の先生に叱られた。自分たちのルールは自分たちで決めるという主権者教育の一環なんだ。こころして司会をしなさい！とね。そうだとすると、1970年代後半から、日本の学校教育から、クラス的事情はクラスが決め子どもたち全体に関わることは児童会で決めるという主権者教育が消え、子どもたち自身で自分たちのルールを議論して決めるのではなく自分たちのルールは偉い人が決めるもんだという教育に転換していたことになる。このことはとても大きな問題だと思うんだ。お面の誕生でね！

原田：その問いかけは面白いです。さきほども触れましたが、さすが古市君の本を読み込んだだけあります。古市君の本は、ポストイットだらけですね。

生江：あっはっは！ あっちこっちにポストイットを張り付けるのが、嫌になって、「なんだこの余裕のある若造は？」つて、その付箋には、「くそつたれ！」とか書いてあるんだよね。

川村：「くそつたれ！」ですか。その気持ちわかります。

生江：この鼎談は最初、みんなで一応、古市君を押さえておこうということだったら7冊読んだけど、もう、読むのが苦痛でさ、本当に嫌になっちゃたんだよ。

川村：ですよ。私も、このために、古市君の本とか、彼のツイッターを見たりしたのですが、苦痛で死にそうでした。

原田：二人とも、古市君の言葉に抵抗したいんですよね。彼の言葉に覆われたくないんですよね。もちろん私もそうですけど。ただ、問題は、やはり先ほど生江先生が指摘してくれた根拠もない言葉がまかり通っている、ということなんでしょう。この点から、古市君を解釈すれば、よく理解できます。たとえば、さっきも話題になった『絶望の国の幸福な若者たち』というタイトルですけど、確かにインパクトはあります。当時、東京大学の玄田有史先生を中心としたチームが、日本の若者は、希望が持てないのではないかという問題提起がなされ、「希望学」なるものが始まっています。もちろん、それは、村上龍の『希望の国のエクソダス』の「この国には希望がない、お金はあるけど、希望はない」という言葉に大きな影響を受けたものです。でも、古市君は、

「別に希望を持ってなくても、日本の若者は幸せだからいいでしょう」という反論を行ったともいえます。もっとも、古市君の本を読んでも、若者が幸せなのかどうかという検証は、満足度が高いという程度の論証ですから、川村さんがいうように「あなたに決められたくない」という反発が自然に生まれてくるものだと思います。そうですね。川村さん。

川村：ええ、もちろん、そうです。

原田：そういう反発は重要ですよ。ただ、もう少し突っ込んで、とくに管理教育の面からいえば、古市君の欠点が浮かび上がってきます。管理教育には、もう一つの重要な面があります。それは、トヨタシステムの要ともいえる「5回のなぜ」を教育に組み込むことです。「テストでよい点が取れないとしたら、その原因を探求しなければ、同じ過ちを繰り返す。だから失敗してもいいけど、たえずその原因を探求しなければならない」という刷り込み教育です。そうした教育を受ければ、仕事の中で、問題を発見するための5回のなぜを繰り返すことに抵抗を感じなくなるわけです。そして、なぜの繰り返しを通して、無駄や失敗の原因を構造的に捉えることができ、生産性を高める人材、社会に役立つ人材になれるわけです。もちろん、頭から「なぜの繰り返し」を否定することはできません。さらに、トヨタシステムのもとでは、5回のなぜを繰り返すなかで、無駄は排除され、生産性が高まり、その成果は従業員に喜びを与え、「生きがい」「やりがい」をも習得できるのだ、といわれれば、その考えはいいんじゃないか、と思えてくる人も少なくないでしょう。しかし、猿田先生は、この「5回のなぜ」の欠点を発見しています。それは、職場で5回のなぜの繰り返し人びとは、「むしろ毎日毎日、長時間・高密度・不規則労働を続けているながら、なぜ生活が豊かにならないのか」という自問をしないのか⁶、というものです。「生きがい」「やりがい」を考える前に、自分の生活の豊かさについて考えるべきであるという、実に明確な指摘です。しかし、この単純な作業ができないんです。というか、この単純な作業を行わないこと、行う力を削いでいくこと、これこそが、管理教育の神髄だと私は考えています。それに、なぜ、できないのか、と思われるでしょうけど、これは、一度でも「パブロフの犬」になったことがない人間には、なかなか理解できないことだとも思います。

古市君も、なぜ絶望なのか。なぜ幸福なのか、という自問を一切しようとはしません。個人のレベルでも、社会のレベルでもまったく考えようとはしません。その意味で言えば、彼こそは、管理教育の申し子ともいえるのかもしれない。それゆえ、小熊英二は、古市君との対談で、彼の作品群を、化学反応がなくて、つまらないと酷評していますが⁷、古市君は、自問しようとはしないのだから、化学反応など起こりようがないでしょう。また、小熊英二は、『絶望の国の幸福な若者たち』のタイトルだけは残るかもしれないといっていますが、私は、自問することがで

6 猿田正機著『トヨタシステムと労務管理』（税務経理教会、1995年。pp. 50-51）

7 小熊英二著『真剣に話しましょう——小熊英二対談集』（新曜社、2014年。pp. 11-12）

きない人びとの存在を歴史的に残すという意味では、同感です。いずれにせよ、「みんなが」「一般的」という言葉、古市君の「幸せでしょう」という言葉が、世の中にまかり通っているのは、その言葉に疑いを持つことができない人びと、つまり多数派お面をかぶった人びとを作り出した管理教育の大きな成果ではないでしょうか。このような話しを素人が語り出すと、飲み屋での話らいレベルだと批判されるでしょうし、お前の話しのどこに客観性があるのかとか、嗤われるだけでしょうけどね。個人的には、まかり通る言葉に潰されないように、川村さんじゃないけど反発していないと生きていられないだけですけどね。

川村：まかり通る言葉ならば、ありふれていますよね。たとえば、最近の反中感情も同じだと思います。先日、授業のなかで、中国について、高校生にアンケートしたら、やっぱり9割が嫌いだと回答したんです。残りは、あんまり好きじゃないと答えるんです。好きという人はゼロでした。じゃ、中国の首都はどこかと聞くと、バンコクとか台湾、ニューヨークと平気で答えるんです。それに、好きな中国料理を聞けば北京ドッグと答えるんですよ。

原田：北京ドッグ？

川村：そうなんですよ、中国のこと、まったく知らないのに、なにが、嫌いという理由はなく、なんとなく嫌いに丸を付けているんですよ。根拠なんて何もありません。

原田：反中感情は、川村さんの生徒だけの問題ではないよ。私も、学生に、「先生、夏休み海外行ったんですか？」と聞かれ、「中国」というと、「え！中国ですか？なんであんなところに行くんですか？」って真顔で言われます。「中国について研究している」というと、汚いものを見つけたような目を向けられます。傷つくことはありませんが、自らの存在意義は、ここにはないと思います。

川村：原田先生！そんなに落ち込まないでくださいよ。中国ネタはやめましょう。もう一度古市君にもどりましょう。管理教育の成れの果てが、古市君の「幸せでしょう」という言葉に繋がるわけですね。でも、どうして古市君は、「幸せ」をキーワードに選んだのでしょうか。

生江：「幸せですか」つて訊かれた時、「いや、幸せじゃない」って言ったら、自分は、敗北者の中に入る、つまり負け組なんだって認めることになるだろうと思うね。「幸せです」といえば、勝ち組の、少なくとも底辺かもしれないけど勝ち組のなかには入っている。そういう問い掛けの言葉だと思う。

川村：そうですね。古市君は、誰もが従うであろう答えを予め用意して、そのうえで、「幸せで

しょう」と問いかける、というか念を押してくるんですね。

生江：ちょっと角度を変えればこんな風にもいえるよ。それは、例えば、ぼくがいろんな国の調査をやっているときに、日本の調査団ね。日本の研究者や調査をやっている人たちのやり方に、ある共通項があることに気が付いた。ふと思った。それはね、私は、AとBとCとDの項目について、情報を知りたい。Aは何パーセント、Bは何パーセント、Cは何パーセントと集める。それは、大きな土の塊のなかに、A、B、C、Dというシャベルというか、磁石のようなものをずっと入れて、それだけを取り出す。で、Aは何パーセント、Bは何パーセント、Cは何パーセント、がこの社会です、で、嘘じゃないんだけど、その他の要素はすべて無視する。つまり自分の知りたい要素だけ取り出してデジタル化するともっともらしく見えるだけ。「それがどうしたの?」「それでこの社会分かったの?」日本と比較した時はわかる。だけど、それが、相手の国を分かったことになるか、と言えば、「全然わかってない」。つまり、自分の欲しいものを最初に決めて、それだけ、引っこ抜くっていう調査があまりにも多くて。うんざり。それがなんなのって、ぼくは、そういう風に考えたときに、「幸せですか?」っていうのは、満足調査みたいなものかもしれない。大学の卒業生に、「大学時代はどうでしたか?」っていう満足度調査みたいなものがあるじゃない。質問項目があるじゃない、8割くらいは満足なんだよね。

原田：自分の人生に満足しないといけないんだという強迫観念みたいなものですね。

生江：今日、こんなもの持ってきた。徳島県海部町という町がかつてあって（現在は海陽町に合併）、そこが、全国の地方自治体で自殺者の一番少ない自治体だった。で、なぜだろう、って調査をした人がいてね、岡檀（おか・まゆみ）さんという和歌山大学看護学部の講師をされてる、その方がその本（『生き心地の良い町—この自殺率の低さには理由がある』講談社）の中で、「あなたは幸せですか?」っていう問いに対して、答えが、「幸せ」、「不幸」、「幸せでも不幸でもない」っていうパターンがあったけれど、一番多かったのは、「幸せでも不幸でもない」で、幸せって答える人はものすごい少なかった。で、ん～面白ってぼくは思うんだよね。

川村：なるほど、「幸せでも不幸でもない」、つまり、「分からない」。それが正解ですよ。中国好きですか? 嫌いですか? と聞かれれば、「分からない」が正解ですよ。でも、「分からない」と言ってしまうと、多数派で入れなくなるから、理由なんか関係なく、「幸せだ」といったり、「満足している」と思い込んだり、それに「中国嫌い」と言い続けるんでしょうね。

原田：「分からない」、確かにその通りですね。「分からない」だから「知りたい」とか、「知らない」だから「行ってみたい」とか「先生、連れて行ってください!」という学生だらけの時代はもう遠い過去の出来事ですが... それに、「分からない」というのは、まさに自問の始まりです

コラム7 赤塚不二夫の後継者 原田 忠直

桑田佳祐は、2016年6月、約3年ぶりとなるソロシングル「ヨシ子さん」のPVで、股間にバナナのようなものを装着し、楽しげに腰を振りながら「エロ本！エロ本！エロ本！」と歌い上げた。NHKの歌番組「SONGS」（2016年6月23日放送）で、「何故、エロ本なんですか？」と問われた桑田は、「エロ本は、人格形成に役立った」と真顔で答えた。そんな桑田を、カメラの後ろに控えていたスタッフたちは、ドン引きし、失笑するようでもあった。もちろん、スタジオに充満した「？」は、一つの演出だったかもしれないが、画面から伝わる桑田の孤独感は、むしろ彼の才能を際立たせた。まるで、赤塚不二夫が蘇ってきたようでもあった。赤塚不二夫が、桑田の「エロ本」論を聞いたならば、「バカだからこそ真実を語れるんじゃないか」と評価しだろう。そして、「まだまだ俺には及ばないけど、お前もなかなかルールを壊すプロだね」と激励したことであろう。

言うまでもなく、赤塚も桑田も天才である。もちろん、世の中には色々なタイプの天才が存在しているが、二人に共通しているのは、社会のど真ん中で、常識とされている事柄を笑い飛ばすことを簡単にやってみせる才であろう。しかし、こんなタイプの天才たちは、最近、あまりお目にかかれない。もはや時代は、彼らを必要としなくなってしまったのだろうか。バカには真実を語ることが許されない時代になってしまったのだろうか。あるいは、他者の愚かさを笑うことしかできず、常識から外れた人びとを非難することしかできない時代になってしまったのだろうか。いつから？ どうして？ と思わざるを得ない。時として、多数派お面は、そんな天才たちの馬鹿さ加減を目の当たりにした時、ふいに外れることもあるだろう。それゆえ、天才桑田には、還暦を迎えたからといって詰まらぬ説教じみた話は語らず、そして歌わず、これまで通り全力で時代を笑い飛ばして欲しい。もっとも、桑田佳祐ソロデビュー30周年の2017年ツアーでは、相変わらず水着のお姉ちゃんに囲まれ、そのおバカぶりはいかに発揮されていた。さらに2018年、サザンオールスターズ40周年ツアーでは、原由子の視線を背中であげながらも、愉快で、おバカで、愛すべき桑田が躍動してくれるだろう。何はともあれ、赤塚不二夫の後継者は、散歩ばかりしているタモリではなく、桑田佳祐その人しかいない。

し、本来、ここが出発点になるわけですよ。でも、「分からない」から、「みんな」は何と言っている、とか「一般的」に言えばどのあたりが正解ですか、とついつい周りを見てしまうんでしょうね。

さて、今日は、高校生のアンケート結果から話を始め、「多数派お面」について話を進めてきたけど、結局、この「多数派お面」は誰がつけているのか、そろそろまとめに入りましょう。つまり、この一連の「多数派お面」の話は、どうしても「多数派お面」=「若者論」に寄りがちだったと思います。でも、「若者論」にすると、話が詰まらなくなる。「最近の若者はなっていない」というのは、いつの時代でも言われてきたことだし、「若者」だけに焦点を当てると、本質を見失うと思う。だから、あえて言えば、今、この社会で問題なのは、若者論ではなくて、むしろ「最近の大人」論を語らないとまずいということなんだと思う。そもそも、蛭川みたいな人がいないことが問題なんでしょう。つまり、大人の人材不足が深刻なんじゃないかな（コラム7・参照）。さきほどの生江先生の問題提起を簡単に言ってしまうと、大人の大多数が、「多数派お面」を被って、次世代を担うべき子どもや若者を、自分たちのクローンとして養成するという再生産構造が根を張ってしまっている。このループから逃れられなくなっているんじゃないのか、ということですよ。

生江：うん、そうそう！ 来るべきところに辿り着いた感がするね。さっき紹介した岡さんの本

の中に、この海部町が色々な地方からの人が寄せ集まってできた町であるという背景の中で、いくつかの大事な特徴を指摘しているんだけど、その中に、「いろんな人がいてもよい、いろんな人がいたほうがよい」という共通の認識がこの町の人にはあるっていうんだ。みんな同じってことに価値を置かない、そしてもう一つ、ぼくは面白いなあと思ったのは、「病は市に出せ」という言葉があるんだってさ。困ったことがあったらほかの人に話してみな、好い知恵が集まってくるよということかな。自立っていう言葉を絵に描いてみて！と学生たちに描いてもらうと、99%はたった一人で生きて暮らしている絵を描くんだ。でも、海部町で訊いたら全く別の絵がでてくるかもね。賑やかに互いを支え合うのが「いっちょまえ」だよってね！

鼎談の締め、そしてはじまり

原田：本当ですね。それでは、最後の問いかけとして、私たちは、何ができるのでしょうかね。まあ、自分に何ができるのかっていうことを考えてみようという終わり方って、正直、日本人的な発想すぎて好きじゃないんですけど、ただ、そうでもしないと終わりそうにないので、あえて問わせていただきます。「多数派お面」を脱ぎ捨てて、自分だけの「仮面」を付けることができるようにするためには、どうすればいいのか。もちろん、それは、自分自身に対して、「多数派お面」をはめて、考えたり、話したりしてない？と自問することは必要だろうけど、「大人」の視点から何をすればいいのか、具体的に話してください。まずは、川村さんからどうぞ。

川村：えっ、私からですか。私はまだ「若者」のつもりですけど....

原田：立派な高校教師じゃない。さあ、早く締めてよ～

川村：わかりました。そうですね、さっきも言いましたけど、授業で、私のお気に入りの映画をみたり、海外の写真をみせたりするような授業を時々はさんでいければと思っています。とくに、私が、趣味で撮ってる中国の面白い写真、たとえば、仕事中に寝ている人びとの姿とか、お菓子食べたり、タバコ吸いながら、接客している人びとを紹介していきたいですね。それで、少しでも反中感情を見直してくれたり、労働観を考え直してくれるきっかけになるよう授業をしていきたいですね。それと、最後に、私なりに、今回の鼎談をまとめると、ブリューゲルの絵に戻って話しますと、「多数派お面」を付けたままだと、ブリューゲルは有名だ。だから素晴らしい、ということになります。学校ならば、ブリューゲルという名前を覚えることが重要ですよ。でも、その絵の中に描かれた人びとの様子、表情なんかは、まったく学ぶ必要のないことでしょう。まさに、ブリューゲルの絵のなかに登場するような人びとを現代の社会の中で探し、生徒たちに伝えるべきだと考えています。それが、私の役目かなと思っています。

原田：おー、なかなか綺麗にまとめたね。日本のおじさん二人に囲まれて、大変だったと思いますが、これからも中国にいて、面白い写真や、動画を撮りまくって、時に教壇から降りて、もちろん解雇されないように注意して、楽しい授業をしてください。期待しています。ありがとうございました。頑張ってください。それでは、最後に、生江先生に今日の鼎談を締めさせていただきます。

生江：古市君の本を何冊も渡されて読み始めてみたら、そのうち、何か金太郎あめを読んでいるようで疲れてしまった。そして考えたのは、出版界やマスコミの世界が、いかなる理由で彼をモてはやしているのか、つまり、古市君を語る必要はなくて、むしろ「古市現象」とは何かを考える方がまともだと考えていました。その意味で、この鼎談は、『絶望の国の幸福な若者たち』の読書ノートとしてあると言えます。「物は言いよう」という言葉がある。彼のためにある言葉です。「こういう現象がおきています、それは真実です」と彼は言いたいように思う。でも事実は現象、真実は本質を言うのであれば、そこに巧妙なすり替えが起きている。表面を撫でまわす彼の流儀にうんざりして思わず出てきた言葉が「くそったれ」です。これはアルフレッド・ジャリの不条理演劇と言われた戯曲『ユピュ王』の中で、ユピュ王（ユピュ親父）と蜷川が演じたユピュの妃（かみさん）の口癖のセリフです。「バカ！」はひとを下に見てののしり、「くそったれ！」は上に上がっている者に向かい、「お前は俺と同じくそったれだ！」というののしりというか、覚醒を促すセリフです。彼は口が悪い社会学者と呼ばれているらしいけれど、ぼくの印象は、レッテル作り（ラベリング）が上手な、口がうまい社会学徒です。

原田：「くそったれ」の由来はそんなところにあったんですね。でも、鼎談の締めとしては、古市批判で終わるには、少々物足りなさを感じます。もう少しまとめてください。それに、川村さんがブリューゲルを引き合いに出してくれて思い出しました。ほら、『盲人の寓話』の転んだ盲人たちが立ち上がりながら、どんな言葉を発するか？ この点も踏まえてまとめていただくと嬉しいです。ちなみに、私は、こう考えます。転んで泥だらけになった盲人Aは「また転んだのかよ？ しっかり足元確かめて歩けよ！」と盲人Bに叱責される。泥をその手で払いながら立ち上がった盲人Aは、「盲人は転んでなんぼ！ 転ぶ者こそが正しき道を歩むのだ」と明後日の方向に向かって胸を張る。すると盲人Bが「なぜ、転んだのかその原因を追究しろ。そうじゃないと転び続けることになるじゃないか？」と一言。その言葉にみんなは頷き、盲人Aに改善策を求める。しかし、盲人Aは「お前たちは馬鹿か？」と鼻で嗤い、「原因は、神か悪魔の仕業にほかならない」と再び胸を張る。そして、幕。

生江：すいません！ 最後に一言、んっ二言かな？ 一つは、前回の宿題になっていたブリューゲル『盲人の寓話』の次の場面のこと。ぼくは、「しっかり前を見てろよ！」と一番後ろがその前に怒鳴る。怒鳴られた彼は、「俺はちゃんと前のやつに付いていったんだ！ 俺の前のやつ、しっ

かり前を見てるよ!」。次から次へと同じ言葉が叫ばれ、先頭の初めに転んだ彼は、こう叫ぶ、「誰だ目の見えない俺についてきたのは!」。一同、ぎょっ! これって、日本の我々のこと言っている寓話? かな。指導要領と教科書に付いてやっています! と次々に従っていくが、先頭がどんな人かわからずに付いている! ぎょっ! まさに寓話だね!

最後の一言は、楽しく充実した鼎談を体験出来てお二人に感謝、感謝です。A か B かで議論していると、C じゃないんですか? と合の手が入る。今度は冷静により広い視野の中で見ようとする、この小気味良さがたまりませんでした! この鼎談の中で、新しい発見や考え方が感想から論理へと展開したりと、世に言う Active learning とはまさにこれだね! と愉快でした。これからも大いにやりたいですね! お疲れ様、ありがとう!

原田: みなさん。長い時間、お疲れさまでした。また、このような機会があれば集まりましょうね。それではまたです。